

まえがき

本書に興味を持っていただきありがとうございます。はじめに申し上げておくと、本書は「発達障害とは何か?」、および「発達障害の人が現在の社会にどう適応していくか?」ということについては一切触れていません。では、何が書かれているのかというと、『発達障害のある人たちが自分の感じ方に正直に生きる』という、発達障害のある人の新たな生き方の可能性についてです。

私は、幼少期から一風変わった世界の捉え方をしていました。みんなが楽しめることを楽しめず、退屈しがちで、飽き症で、衝動性を絵に描いたような子どもでした。しかし、そんな私もその他大勢と同じように大学を卒業し、サラリーマンや公務員として働いてきました。その途中で結婚し、子どもを授かり、一児の父として安定した生活を送っていました。傍から見れば、人生順風満帆といったところなのでしょう。しかし、私自身はその安定した生活に対し、常に違和感を持っていました。毎日関わる人たちに対し、苛立ちを感

じながらも、どこか諦めたように接していました。生活圏は狭く、いつも同じことだけを繰り返し、職場以外では人に会うこともない。趣味という趣味も特になく、昔はやりたいたことがあった気がするけど、何がやりたかったのかも忘れてしまっていました。よかれと思つて家事や仕事を頑張つてみても、空回りして愛想をつかされる。そんな日々を送っていました。

私は重度発達障害の人たちや、虐待を受けたり、非行に走つてしまった子どもたちを支援する仕事をしてきました。彼らは自分を押し殺して生きており、彼らの家族は、彼らのことを隠し、彼らが問題行動を起こす度に泣いていました。世の中に知ってもらいたいと私が感じるような「彼らだけの感じ方」を表に出すことで、友達にいじめられ、先生に叱られ、親からは責められる。私は、そんな彼らを指導し、導く立場にしながら、彼らに対して胸を張つて何かを伝えることができませんでした。「その感じ方は間違つていない」と思っていたからです。私はそう思いながらも社会の代弁者としてそれを正さなければならぬ立場にいたんです。

そして、ついに私はその「自分が背景の一部として配置された箱庭」のような世界から

飛び出すことにしました。仕事を辞め、離婚し、さらには親にも縁を切られながらも、支援してきた人たちや自分自身の感じ方を肯定できるような生き方をすることにしました。

そうやって生き始めて以降、豊かさや安定度、学歴などといった社会に押し付けられたモノサシを越えた『自分だけの感じ方』という何より大切なモノサシに従って生きられるようになりました。そうすると不思議なことに、関わる人たちを信頼することができるようになり、本当に面白いと心から思える人たちとの出会いが次々にやってきました。やりたかったことも次から次に思い出していきました。今は毎日が充実しており、使命感に溢れて生きることができています。

そして、この生き方というのは私だけに相応しい生き方ではないということにも気づきました。私はブログを中心に発達障害の人の感じ方について発信しています。その発信に触れた当事者や支援者、保護者の方たちからたくさん感想をもらい、相談に乗り、一緒に活動してきました。その中で、彼らの多くの悩みというのも、「自分の感じ方に正直になる」生き方で解消されるものであるという確信を得ました。それをより多くの人たちへ伝えるために、書籍というカタチにして残したいと思いました。自分の感じ方に正直に生き

る人が増えていくことが、福祉や教育、医療の業界を、日本を、そして世界を、何百年先の未来をも、大きく変えていくことになるであろうと確信しています。本書は、発達障害の人だけが対象ではありません。彩りを失いつつある『この世界に住むすべての人』に對するメッセージです。

本書が、あなたが感じ方に正直になり、あなたにしか解決できない問題に信頼できる仲間とともに挑みはじめるそのきっかけとなれば幸いです。